

静岡昆虫同好会創立 70 年の歩み

静岡昆虫同好会会長 諏訪哲夫

戦後間もないころ、静岡県にはすでに遠州昆虫同好会があったが、もう一つの昆虫同好会を作ろうとの沼津市に在住の同好者の働きかけもあり、1953年静岡昆虫同好会が発足した。創立時の会員の構成は社会人1名、大学生6名、高校生8名、中学生2名、合計17名、会の代表は当NPO理事の高橋真弓さんで当時大学1年生だった。私はこの時小学校5年生の昆虫少年だったが、小学生でまだ小さいとの理由だったようで会には入れてもらえなかった。

会誌の創刊号は高橋さん自らが版を切り、ご本人の「富士田貫沼採集記」から始まる。会誌の名前は「駿河の昆虫」一般報文の後、インセクトノートという短報が続く。いわゆる表紙がなく第1ページ目から報文が始まりインセクトノートまでこのスタイルは70年経った今も変わっていない。

同好会の会則に定められている会の目的の一つに「郷土の昆虫相の解明」とあるようにこれに向かって精力的に進めた。1950年代から安倍奥の山地、南アルプス、富士山麓を主体に綿密な調査を行い、多くの新しい発見をもたらしている。次第に県境を越えて山梨県の調査も県内と同様に行った。現在の悲劇的な昆虫相の状況と比較して当時の昆虫相は実に豊かだった。これらの調査と並行して1955年、これまでほとんど県内から記録の無かったクロコノマチョウが突如大発生したことから、当時の中学生たちは、このチョウの好適な生息地となっている神社・寺を自転車で回るなどの大活躍をして拡大の状況を明らかにした。この調査は断続的ではあったが2001年まで会として組織的な調査を行った。富士山本



静岡昆虫同好会 会誌「駿河の昆虫」創刊号



1958年 静岡市安東本町 高橋宅の近く



第1回海外昆虫調査 1979年7月
ソヴィエト連邦 コーカサス・ドンバイ

体にはウスバシロチョウはもともと生息していなかったが、1970年代後半から山梨県河口湖あたりを源として富士山を中心として東回りに、西回りに分布の拡大が始まり、1990年頃ついに裾野市で合流することになったが、この年ごとの分布拡大の推移を会の行事として調査し、その成果を会誌に報告している。

2002年、同好会は創立50周年を迎えた。この大きな節目を記念してこれまでに報告されたチョウ類のデータをすべてまとめることとなり、2003年、「静岡県の蝶類分布目録」を刊行した。多くの会員から会誌「駿河の昆虫」に寄稿されたデータは約46,000件だった。

静岡県には誇るべき富士山を有しており、成立年代は南アルプスとは格段に若く、高山蝶は分布しないが火山荒原が広がり、この草原は県内の他の地域では見られない特別な環境で、したがってここに生息する昆虫類もまた特徴的である。このいわゆる草原性のチョウ類に関心が集まった1970年代後半、日本の多くの在来種のルーツはユーラシア大陸であるとされ、草原を知るためには大陸に行くという機運が高まって、1979年、千葉県に在住し、高山蝶ベニヒカゲ属の専門家、木暮翠氏(故人)の提案で、当時はまだソヴィエト連邦であったコーカサスへ調査に行くこととなった。静岡昆虫同好会のメンバーは9名だった。初めて見る大陸、そこに生育する高山植物の美しさと草原性の蝶の豊かさ、さらに当時は安かったキャビアとアルメニアコニヤックの美味しさで、まさに夢そのものの

ような1週間を経験した。この調査の経験がもととなって、シベリア、モンゴル、サハリンと続き調査回数は18回を数えた。これらの調査結果は「海外昆虫調査報告書 ゴシユケビッチ」などに逐次2-3年おきに報告され、現在No.5まで発行している。この書名は、1854年(安政元年)、貿易交渉のため下田に滞在していたロシアのプチャーチンと通訳ゴシユケビッチらは安政の大震災でディアナ号が破壊され帰国できなくなったその間、下田付近でゴシユケビッチは昆虫採集を行った。この時採集されたサトキマダラヒカゲ(*Neope goschkevitchii*)、ノコギリカミキリなどが後に新種として記載された。静岡県-地震-関心のある草原の国ロシア-キマダラヒカゲと関連が深いということから清 邦彦会員の発案で決められた。

2015年、公益財団法人静岡県文化財団が主催する第29回地域文化活動賞を受けたことは会として大きな喜びであった。地道に永年、調査、会誌発行などを続けてきたことに対する評価であるとともに、昆虫相の解明が一つの文化として認められたということの喜びでもあり、今後に対する励みでもあった。

2016年は永年待ち続けた自然史系の博物館が開館した。博物館の設置に向けて各方面に陳情するなどの活動に静岡昆虫同好会としても協力してきたことが報われた時だった。同好会会員が調査研究を続けてきた元となる標本が活かされることになった。この中で最も古い標本は、高橋さんが若いころ親交のあった増井林太郎氏が1907年、藤枝市で採集したメスグロヒョウモンとクロヒカゲモドキで、県内では絶滅してしまった種の標本のほか、わずかではあるがホロタイプ標本(完模式標本)、パラタイプ標本(副模式標本)などを含み、同好会員からの寄贈はこれまで20万件を超える。

2022年は創立70周年になる。多くの会員が高齢になってきたこともあり、節目として会のこれまでの沿革を整理するとともに、これまで積み上げてきた分布調査の集大成として郷土の昆虫、特に県内に記録のあるチョウ全種の分布図を作成する計画である。